

信行要文② 第十二回 法華講夏期講習会 第二期

（平成二十七年五月二十四日）

本日は、テキスト三ページの五『妙法尼御前御返事』から勉強いたします。

5 妙法尼御前御返事

白粉おしろいの力ちからは漆うるしを変へんじて雪ゆきのごとく白しろくなす。須弥山しゅみせんに近ちかづく衆色しゆんじきは皆みな金色こんじきなり。法華ほっけ經ぎやうの名号なごうを持つ人ひとは、一生いっしやう乃至なご過去こくごう遠々うるし劫びやくの黒業くろごうの漆うるし変へんじて白業びやくの大善だいぜんとなる。いわうや無始むしの善根ぜんこん皆みな変へんじて金色こんじきとなり候さうなり。（御書一四八三〇一行目）

本書は、弘安元（一二七八）年七月十四日の御作で、妙法尼からのお手紙に対する大聖人様の御返事です。

それによりますと、妙法尼が亡くなられた夫の臨終の有り様を、大聖人様に詳しくお知らせしたのであります。そこで大聖人様は、臨終の相によって後生ごしやうの果報が推定されることを経論の文証や先聖せんしやうの史実あを挙げて論じ、亡くなった夫の後生は必ず善処であろうと仰せになっております。

次に、諸宗の人々が師匠や父母の臨終の悪相を隠して、浄土往生を言いふらすのは、かえって死者の苦しみを増すものであると言われ、それに対して、亡くなった夫の死相が良かったのは、まさに後生善処を表すものであるとお教えになり、尼の悲しみを慰められております。

さらにまた、そのあとには唱題の功德を述べて、亡くなった夫の臨終における唱題は即身成仏けつじやうを決定するものであると言われ、最後に、亡夫の成仏より推して、あなたの成仏もまた疑いないと激励されております。

それでは、本文に入ります。

初めに「白粉おしろいの力ちからは漆うるしを変へんじて雪ゆきのごとく白しろくなす」とありますが、これは題目の力を白粉に譬えて仰せられたものであります。

同様のお言葉として『千日尼御前御返事』にも、

「譬へば黒漆に白き物を入れぬれば白色となる。女人の御罪は漆の如し、南無妙法蓮華經の文字は白き物の如し」（御書 一二九〇）

と仰せになっております。

また『聖愚問答抄』を拝読いたしますと、

「此の妙法蓮華經を信仰し奉る一行に、功德として来たらざる事なく、善根として動かざる事なし。譬へば網めの目無量なれども、一つの大綱を引くに動かざる目もなく、衣の糸筋あまた巨多なれども、一角を取るに糸筋として来たらざることなきが如し」（同

四〇八(六)

と仰せられておりました、この妙法を信受する廣大なる功德について「功德として来たらざる事なく、善根として動かざる事なし」と御教示であります。

さらに『新尼御前御返事』には、

「此の五字の大曼茶羅を身に帶し心に存ぜば、諸王は国を扶け万民は難をのがれん。

乃至後生の大火炎を脱るべしと仏記しをかせ給ひぬ」(同 七六四)

と仰せになっております。

このように、私達は、大御本尊様の廣大なる功德を心から拝信し奉り、南無妙法蓮華經と唱えていくことが最も肝要であることを知るべきであります。

次に「須弥山に近づく衆色は皆金色なり」とあります。

「須弥山」というのは、皆様方も御承知の通り、古代インドの世界観で世界の中心にあるとされる山であります。妙高あるいは安明なども訳されますが、そもそもこれは海上にありまして、高さは八万四千由旬あり、頂上の忉利天には帝釈天が住み、そして中腹には四天王が住み、周囲を七つの海と七つの金山が交互に取り巻き、その外側に鹹水つまり塩水を湛えた外海と、これを囲んで鉄圍山があります。そして、外海の四方には四つの州が浮かんでおり、これを弗婆提・閻浮提・瞿耶尼・鬱單越の四州と言います。我々人間は、そのなかの閻浮提州に住んでいるという、非常に広大な世界観であります。

『薬王品得意抄』にも、

「須弥山は金色なり。一切の牛馬・人天・衆鳥等、此の山に依れば必ず本の色を失して金色なり。余山は爾らず。一切の諸經は法華經に依れば本の色を失ふ」(同 三四九)

とあり、ここでは須弥山を法華經に譬え、衆色を諸經に譬えて、金色は仏身を指し、法華經の題目を唱える人は、過去遠々劫の罪障を消滅して、悪業も白業の大善と轉換されると仰せになっております。

すなわち、この御文は、末法において三大秘法の大御本尊を信受し、勇猛精進する人は、すべて宿業を轉換し、金色の仏身という成仏の境地を必ず開くことができる、と仰せになっておられるのであります。

次に「法華經の名号を持つ人は、一生乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。いわうや無始の善根皆変じて金色となり候なり」と仰せであります。

須弥山に近づけば、すべての色が金色となるように、法華經の題目を唱える人は、今生乃至、過去遠々劫の長い間、作ってきた漆の如き黒業は皆、変じて白業となる、すなわち限りなき昔からの善根は皆、仏身となると仰せられているのであります。これは、題目受持の功德がいかにか大きいかということを示されているのです。

「白業」というのは、善い結果を招く業因、善業の異称であり、「黒業」というのは、その反対であります。『大乘義章』という書物には、

「善法鮮淨なる、之を名づけて白と為す」

とあります。法華講連合会の機関紙は『大白法』という名前ですね。そのように、仏法では、白は善を譬えるケースが多いのです。それに対して、黒は悪の意味になります。そういう立て分けが、経文のなかでは、よく使われておるのです。ですから、白業が善い結果を招くのに対して、黒業は、まさに不浄な苦果を感じずる因となるものであります。

されば『千日尼御前御返事』には、

「法華経の妙の一字は小火の如し。小火を衆草につきぬれば、衆草焼け亡ぶるのみならず、大木大石皆焼け失せぬ。妙の一字の智火以て此くの如し。諸罪消ゆるのみならず、衆罪かへりて功德となる。毒薬変じて甘露となる是なり。譬へば黒漆に白き物を入れぬれば白色となる。女人の御罪は漆の如し、南無妙法蓮華経の文字は白き物の如し」(御書 一二九〇)

と仰せになっております。

「法華経の妙の一字」すなわち妙法蓮華経の功德について、諸々の罪が消えるばかりではなく、多くの罪が、かえって功德となるのであり、「毒薬変じて甘露となる」というのはこのことであると、大聖人様はおっしゃっているのであります。

この「毒薬変じて甘露となる」というのは「変毒為薬」つまり、毒を変じて薬と為すという文と同じ意味でありまして、これは『大智度論』に、

「大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」

とある文に由来しております。つまり、妙法の偉大なる功力によって、一切衆生の悪業が善業に転ずることを示されているのです。

私達は、様々な悪業を過去世において積んできたし、また、あるいは今世においても積んできたかも知れません。しかし、それらの悪業も、南無妙法蓮華経と唱えることによって黒業が白業に転ずる、つまり悪業が善業に転じていくと仰せなのです。それはすべて、私達が大御本尊様に対して南無し奉り、妙法蓮華経と唱えることによってかなうのであり、それ以外に過去世からの、また今世で作った様々な罪障を消滅する方法はないわけですから、我々の普段の朝夕の勤行、そして化他行である折伏、この自行化他にわたる信心が極めて大事なのであります。ですから、これをしっかりと行じていくところに、変毒為薬する功德が必ず来たるのであります。

次に『内房女房御返事』です。

6 内房女房御返事

妙法蓮華経と申し候は一部八卷二十八品の功德を五字の内に収め候。譬へば如意宝珠の玉に万の宝を収めたるが如し。一塵に三千を尽くす法門是なり。南無と申す字は敬ふ心なり、随ふ心なり。故に阿難尊者は一切経の如是の二字の上に南無等云云。南岳大師云はく「南無妙法蓮華経」云云。天台大師云はく「稽首妙法蓮華経」云云。(御書一四九〇七行目)

この『内房女房御返事』は、弘安三(一二八〇)年の八月十四日、大聖人様が五十九歳の時に、駿河国庵原郡の内房に住む、内房女房に与えられた御消息であります。

対告衆である内房女房は、ちょうど大聖人様の母親のような年齢であったと思われま
す。『三沢抄』によりますと、この内房女房が、神社に参詣したついでに、大聖人様を
訪れたことがあるのです。ところが、大聖人様は、けっしてお目通りを許しませんでした。
そして、内房女房の不心得を指摘されているのですが、その部分について解りやすく
言いますと、

「先般、内房の尼御前が老齡の身で、わざわざ身延におられる大聖人様の所に来たけ
れども、氏神への参詣のついでとということであったので、お目にかからなかったの
で」(御書 一二〇四^〇取意)

と、こうおっしゃっているのです。というのは、

「もし、その時、情にかられて内房の尼御前にお目にかかったならば、かえって尼御
前に謗法罪を作らせることになったからです」(同^〇取意)

と仰せであります。そして、

「なんとなれば、神は従者であり、法華經は主君でありますから、従者への参詣のつ
いでに主君を訪ねるということは、世間の道にも背くことになり、まして尼の身とな
っては仏を先とするのが当然のことである」(同^〇取意)

と、その不心得を指摘されているのであります。

このように、尼御前が神社へ行ったついでに身延を訪れたことに対して、大聖人様は、
それは謗法であり、おかしいと仰せになり、神はあくまでも所従であるのだから、主と
従を間違えてはならないと言って、信心の筋道を教えられているのであります。

そしてさらに、

「これは尼御前一人に限ったことではなく、そのほかの人達でも、例えば下部の湯の
ついでにと行って訪ねてきた者もたくさんいましたが、それらは皆、追い返してしま
ったのです。尼御前は、私から見ると親のような老齡であり、尼御前の嘆きのほどは
察せられますが、このような意義を知らせるために、心ならずもお目にかからなかつ
たのです」(同 一二〇五^〇取意)

と、大聖人様御自身が、このように信心の筋道ということを厳しくおっしゃっているの
です。

ここに、下部の湯に来たついでにと行って大聖人様を訪ねるといのは間違いだと仰
せですが、これは言うならば、熱海の温泉に来たついでに、お山に来たと言うようなも
ので、それではだめなのです。

特に、登山の精神というのは、本門戒壇の大御本尊にお目通りするという大義名分が
あるのであり、御戒壇様にお目通りするということは、大聖人様にお目通りするとい
うことでもあります。皆さん方は、こうして登山なされているわけですから、重々解って
いらっしゃると思いますけれども、私達はそういった信心の在り方を、しっかりと認識し
ていかなければならないと思います。

さて、本抄の概要を申しますと、まず内房女房が亡き父の百ヵ日忌に、御供養と願文を大聖人様に差し上げたのであります。願文というのは、願主の願意を記した文であります。それに対して、題目を唱える功德の大なることを明かされ、一切経は妙法蓮華経の所従であり、そのことを知らない他宗の誤りを指摘されて、さらに亡くなった父が存生ぞんしょうの間に南無妙法蓮華経と唱えて亡くなられたことについて、即身成仏は間違いないと言われているのであります。

その願文のなかには、

「読誦し奉る妙法蓮華経一部、読誦し奉る方便寿量品三十卷、読誦し奉る自我偈三百卷、唱へ奉る妙法蓮華経だいみょうべんの題名五万返」(同 一四八九頁)

と記されていたのです。すなわち、亡くなった父の百ヵ日忌に当たりまして、この女房は法華経二十八品の全部を一遍、方便品と寿量品を三十遍、寿量品の自我偈を三百遍、それぞれ読誦し、さらにお題目を五万遍唱え、亡父の成仏を願ったということが記されているのであります。

現在、どの末寺におきましても、唱題会をやっていると思います。皆さん方もしっかり唱題をしておるとは思いますけれども、大聖人様の御在世当時から、このように五万遍ものお題目を唱えきっていた女性がいたということです。私達も、往時のこういった方々の強盛ごうじょうな信心の姿を、しっかりと見習っていかなければならないと思います。

お題目は唱えれば唱えるほど、功德まさをが勝るわけでありますから、一遍の題目よりも百遍、百遍の題目よりも千遍と、しっかりと唱えていくことが、とても大事であります。

また次に、輪陀王りんだと白馬めみょう、白鳥と馬鳴菩薩の故事を引かれて、諸宗の謗法を破折されております。これを解りやすく言いますと、

「昔、過去の世に一人の王様がおり、その名を輪陀王と言った。この王様は、白馬のいななきを聞くと、身体の色つやも美しく、力も強く、別に食事を差し上げなくても食に飽きており、他国の敵かぶとも兜ぬを脱ぎ、尊敬していた。

この白馬は、白鳥を見ると鳴くのですが、王様の政まつりごとが悪かったのか、あるいは過去の悪業を感じたのか、ある時、白鳥が皆いなくなったので、白馬もまた、さっぱり鳴かなくなってしまった。そして、白馬が鳴かないため、今度は王様の身体の色つやも変わり、力も衰え、身体も痩せ、謀やも薄はかりごとくなったので、国が乱れてしまい、他国から攻められたらどうしようかと、嘆くようになってしまった。

そこで、王様は勅宣ちよくせんを発して『国には外道が多く、皆、我が帰依するところであり、仏法もまた同じである。それなのに、外道と仏法は仲が悪い。どちらか、白馬を鳴かせたほうを信じて、一方を我が国からなくすことにしよう』とおっしゃった。

そこで、一切の外道が集まって、なんとか白鳥を呼び寄せて白馬を鳴かせようとしたが、白鳥は現れなかった。これらの外道は、昔は雲を呼び、霧を降らし、風を吹かせ、波を立て、身の上に火や水を現じ、人を馬にし、馬を人に変えるなど、一切、自由自在であったけれども、どうしたことか、彼らがいくら祈っても、白鳥を現すことはできなかった。

その時に、馬鳴菩薩が十方の仏様に白鳥が現れることを御祈念したところ、たちまち白鳥が現れた。外道が、いくら心を込めて祈っても、白鳥は全く現れなかったのに、馬鳴菩薩が願ったならば、白鳥が現れた。そして、白鳥が現れると、当然の如く、たちまち白馬がいなくなるとのことである。

王様は、これを聞くと、身体の色つやもよくなり、力もつき、膚も鮮やかにになり、また一羽、また一羽と、千もの白鳥が戻ってきて、千の白馬が同時に、鶏が鳴くようにいなくなると、王様はこの声を聞かれて、色つやは日輪のように輝き、膚は月のように鮮やかに、力は那羅延という、大力の神様のように力も強くなった。また、謀は梵天王の如くで、梵天王というのは仏法の守護神で、帝釈天と並んで諸天善神のなかの最高位を占めている神様であり、その梵天王のように、王様の力は戻った。

そして、汗は吹き出したあと、身体の中に戻ることがないように、天子が一度、発した言葉は取り消すことができないので、王様は一切の外道の寺を仏寺、つまり仏教の寺としてしまった」(同 一四九二頁取意)

という話が述べられております。

大聖人様は『曾谷殿御返事』に、この輪陀王の故事を引かれて、

「白馬は日蓮なり。白鳥は我らが一門なり。白馬のなくは我等が南無妙法蓮華經のこえなり。此の声をきかせ給ふ梵天・帝釈・日月・四天等いかでか色をまし、ひかりをさかんになし給はざるべき、いかでか我等を守護し給はざるべきと、つよづよとをぼしめすべし」(同 一三八六頁)

と述べられ、まさにお題目の力が極めて大きいことを御教示であります。

また、私達が朝の勤行の初座の時に、東方に向かって読経をいたしますね。まさにこれは、大日天王を代表とする諸天善神に対して、南無妙法蓮華經の法味を捧げる意味から行うこととあります。法華經の安樂行品にも、

「諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之を衛護す」(法華經 三九六頁)

という言葉があります。つまり、諸天善神は正しい仏法を護持弘通する法華經の行者を、昼夜にわたって守護すると説かれているのであります。その諸天善神に法味を捧げるといふ意義から勤行を行うのでありまして、諸天善神そのものを拝んでいるわけではないのです。

法味とは正法の妙味のことと、諸天善神はこれを唯一の食として威力を増すとされております。つまり、醍醐味である法華經を最高の法味として、末法においては南無妙法蓮華經の題目を唱えることを唯一の法味として、我々は普段の勤行のなかで諸天善神に捧げているということとあります。

それでは、本文に入ります。

初めに「妙法蓮華經と申し候は一部八卷二十八品の功德を五字の内に収め候。譬へば如意宝珠の玉に万の宝を収めたるが如し。一塵に三千を尽くす法門是なり」と仰せであります。この御文は、題目には法華經の功德がすべて収められていることを明かされています。

これは、この御文の前の部分から続いている意味がありまして、そこには、

「法華経が日本に伝来してから、法華経八巻、あるいは一巻、あるいは方便品・寿量品、あるいは寿量品の自我偈等を読誦し、讚歎して、様々な所願を成就した先例は多いけれども、題目を五万遍も唱えた例は少ない。

ただし、一切諸法には必ず名があり、その名は皆、その体たいに具わる徳を顕しているのである。例えば『石虎將軍』は、石の虎を射通いとおしたから、その名が付いたのである。また『的立まとだての大臣おとど』は、鉄の的を射通したから、その名がある。これらは皆、名に体の徳を顕しているのである」（御書 一四九〇^〆取意）

と、このようにおっしゃっております。

石虎將軍というのは、皆さん方もよく御承知の通り、親の仇かたきとと思って虎に矢を射いったところ、見事、その矢が虎に突き刺さった。そこで、そばに寄ってみたら、実は虎ではなくて石だったということです。いわゆる「一念、岩をも通す」という故事で、親の仇を討ちたいと思う、その一念心によって、普通は通るはずもない岩に、矢が通ったということから、意志の強さがいかに大切であるかを説かれます。このことによって、石虎將軍という名前が付けられたのです。

また、的立まとだての大臣おとどというのは応神、仁徳天皇に仕えた戸田宿禰とだのすくねのことで、『日本書紀』によれば、高麗から献上された鉄の的を弓矢で射通したことから、的立まとだての大臣おとどと言われるようになったということです。

かくの如く、名は体を顕するのでありまして、妙法蓮華経の五字のなかにも、法華経の一部八巻二十八品の功德をすべて収めておることは、まさに如意宝珠にすべての宝を収める如くである、と仰せられているのであります。

同様に『聖愚問答抄』には、

「法華一部の功德ただは只妙法等の五字こもの内に籠れり。一部八巻文々ごとに、二十八品しょうき生起かはれども首題の五字は同等なり。譬へば日本の二字の中に六十余州島二つ入らぬ国やあるべき、籠らぬ郡こおりやあるべき。飛鳥とよべば空をかける者と知り、走獸といへば地をはしる者と心うる。一切名の大切なる事蓋し以て是くの如し。天台は名詮みょうせん自性・句詮差別とも、名者大綱とも判ずる此の謂れなり。又名は物をめす徳あり、物は名にゆう応ずる用あり。法華題名の功德も亦以て此くの如し」（同 四〇七^〆）

と仰せになっております。

ここに「名詮自性」という言葉が出てきましたけれども、これは「名は自性をあらわ詮す」と読み、名字はそのものの性質とか、あるいは本体を顕しているという意味であります。つまり、名がいかに大切であるかということをおっしゃっているのです。

次の「句詮差別」というのは妙楽大師の言葉でありまして、「句は差別を詮す」と読み、句は文章中の一区切りで、詮はつぶさに説き明かす、差別は他との相違という意味があり、つまり一句の文はよく他との差別や相違、特質を説き明かすという意味の言葉であります。

また「名者大綱」というのも、だいたい同じ意味でありまして、名は大綱を顕すとい

う意味です。

このように、名前というのは色々な物を示す徳があるのです。ですから、名前を言えば、それが何であるかを想像できるわけであります。したがって、名には物を呼び寄せる徳があるから、法華経の題号つまり妙法蓮華経という名にも、そのなかに法華経の徳の一切を顕すのであります。

ですから『曾谷入道殿御返事』には、

「所詮妙法蓮華経の五字をば当時の人々は名と計り思へり。さにては候はず、体なり。体とは心にて候。章安云はく『蓋し序王とは経の玄意を叙し、玄意は文の心を述べ』云云。此の釈の心は妙法蓮華経と申すは文にあらず、義にあらず、一経の心なりと釈せられて候。されば題目をはなれて法華経の心を尋ぬる者は、猿をはなれて肝をたづねしはかなき亀なり。山林をすて、菓を大海の辺にもとめし猿猴なり。はかなしはかなし」(同 一一八八頁)

と述べられております。

すなわち、妙法蓮華経というのは、単なる法華経の題名ではありません。一経の所詮であり、体であり、心であるから、一切の法の功德は全部、この妙法蓮華経の五字に収められているのであります。

だから、私達がお題目を唱える功德は、まことに大きいのであります。ここにあるように、すべての功德が収められている題目を日々、我々は唱えているわけでありますから、その功德というのは、全くもって廣大だということになるのです。

今、申し上げた通り、「妙法蓮華経と申し候は一部八卷二十八品の功德を五字の内に収め候。譬へば如意宝珠の玉に万の宝を収めたるか如し。一塵に三千を尽くす法門是なり」と仰せになっております。「如意宝珠」というのは、意のままに宝物や衣服などを取り出すことのできる宝珠のことを言います。つまり、仏様や経典の威徳がいかに大きいかを、この言葉によって顕しているのであります。

竜樹菩薩が著した『大智度論』の巻十には、如意宝珠とは仏舎利が変じたものであると説かれており、巻五十九には、竜王の脳の中から出たものと示されております。また雑宝蔵経には、摩竭魚という大きな魚の脳中から出たものと説かれており、観仏三昧経には、金翅鳥の心臓が変じたものであるとされております。このように、昔の人は如意宝珠がいかにすばらしい力を持っているかということの説明するために、色々な譬えをされているのです。

そして「一塵に三千を尽くす」というのは、一つのわずかな塵、極小の一微塵のなかに、法界三千のすべてが込められているという意味でありますから、妙法蓮華経には法界のすべてが含まれており、その妙伝を唱える功德は計り知れないものかあるとおっしゃっているのであります。

次に「南無と申す字は敬ふ心なり、随ふ心なり。故に阿難尊者は一切経の如是の二字の上に南無等云云。南岳大師云はく『南無妙法蓮華経』云云。天台大師云はく『稽首妙法蓮華経』云云」と仰せてあります。

ここでは「南無」の意義について「南無と申す字は敬ふ心なり、随ふ心なり」と仰せられております。

そして、釈尊の滅後に行われた第一回の經典結集^{けつじゅう}の時の故事を引かれて、阿難尊者は、一切経の初めに「如是我聞」と書かれた上に、南無と書いたと仰せです。さらに、像法時代の南岳大師は、妙法蓮華経の上に南無を加えて「南無妙法蓮華経」と唱えられ、天台大師は南無ではなく、意味は同じですが「稽首」を付けられて「稽首妙法蓮華経」と唱えられた、とおっしゃっているのであります。

御書にもありますように、南無とは帰命、命を仏様に奉るという意味が存するのであり、命を奉るとは何かと言え、まず仏様に対する敬い従う心、いわゆる尊敬の心がなければだめだということなのです。その上から、阿難尊者にしても、南岳大師にしても、天台大師にしても、南無妙法蓮華経あるいは稽首妙法蓮華経と言っているのであります。

南岳大師や天台大師は、皆さん方もよく知っていらっしゃると思いますけれども、阿難尊者は釈尊の十大弟子の一人で、多聞第一と言われております。出家ののち、釈尊に常随給仕いたしまして、釈尊の説教を全部、記憶していると言われる方です。

釈尊が亡くなったあと、お弟子達が集まって、釈尊の説かれた教えを集め、お経として残したのです。阿難尊者は、その時に中心的な役割を果たした人です。こういう方が、一切経の初めに南無と付けているということです。

ちなみに、稽首^{ひたい}というのは相手の足に自分の額^{ひたい}を付けて礼拝することを言います。仏教におきましては、仏様に対する一つの作法、礼法がありまして、ひざまずいて両手を差し出し、相手の足を受けて、顔面に触れることを言うのです。これは、両膝と両肘、そして顔面の五つを地に付けるので「五体投地」とも呼ばれますが、そのようにして仏様を敬うのであります。

これについて、竜樹菩薩の『大智度論』には三つの意義が説かれてありまして、一つは「口礼」^{こうらい}すなわち言葉による礼で、二つには頭を地に付けずに、ひざまずくだけの礼、三つには頭も地に付けての礼という、三種を明かしております。稽首という意味は、我々の身体の上で、最も上にある頭を、最も下にある足に付けて礼を尽くすということです。それだけ仏様に対する尊敬の念、敬意を表しているのです。

そこに帰命^{きみょう}、命を帰す、命を奉るという意味があるのでありますから、帰命と南無と稽首は同義であります。

その南無とは、いかなる意味かという、『白米一俵御書』に、

「南無と申すはいかなる事ぞと申すに、南無と申すは天竺のことばにて候。漢土・日本には帰命^{きみょう}と申す。帰命と申すは我が命を仏に奉ると申す事なり(中略)さればいにしへの聖人賢人と申すは、命を仏にまいらせて仏にはなり候なり」(同一五四四^成)とおっしゃっております。仏様に我が命を奉るという意味では、

「一心欲見仏 不自惜身命」(法華経 四三九^成)

という御文がありますね。あるいは「死身弘法」という言葉もあります。そういうことを、南無と言うのであります。

これは、言葉で言うのは簡単で、たれでも言えるわけです。しかし、それを色心の二法にわたって実践できるか、本当に仏様に対して南無し奉るかどうかが、私達の成仏、不成仏の大きな岐路になるのです。ですから、身口意の三業にわたって、しっかりと題目を唱えて南無し奉り、折伏を行じていくのと、口先だけで言うのとでは、その功德は全く違うのであります。

『南無御書』には、

「三世の仏は皆凡夫にてをはせし時、命を法華經にまいらせて仏になり給ふ。此の故に一切の仏の始めは南無と申す。南無と申すは月氏の語、此の土にては帰命と申すなり。帰命と申すは天台釈して云はく『命を以て自ら帰す』等云云。命を法華經にまいらせて仏にはならせ給ふ」(御書 一六七二頁)

と仰せになっていらっしゃいます。

すなわち、南無とは帰命と訳し、その帰命とは我が命を仏に奉ることであり、命を「法華經」すなわち妙法蓮華經にまいらせることであると仰せであります。ここに、帰命ということの大事な意義がありまして、結論的に言うと、帰命というのは、人法一箇の大御本尊様に我が命、我々にとって一番尊い自分の命を奉るということであります。

帰命ということには色々な解釈がありますけれども、一つには、我々の一生というのは、言うなれば、我々に与えられた時間であります。ですから、命を奉るということは、その尊い時間を、一生の間で、どれだけ仏様に奉ることができるのかということとも言えるでしょう。それを變に誤解して、腹を切ることだけが命を奉るというような考えを持つ人がいたとすれば、そのようなことではないのです。やはり、我々に与えられた尊い時間を、どれだけ仏様のために、広宣流布のために、一切衆生救済のために使えるかということなのです。

寝ていては、それはできませんよね。怠慢だったら、できませんよね。やはり、そこに、命を仏様に奉るという尊い行業があるのであり、このことは非常に大事なことだと思います。

次は、七番目の『内房女房御返事』です。

7 内房女房御返事

妙法蓮華經の徳あらあら申し開くべし。毒藥變じて藥となる。妙法蓮華經の五字は悪變じて善となる。玉泉と申す泉は石を玉となす。此の五字は凡夫を仏となす。されば過去の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人なり。石變じて玉と成るが如し。(御書一四九二頁一〇行目)

この御文は、妙法蓮華經について変毒為藥の徳があることを示されております。

初めに「妙法蓮華經の徳あらあら申し開くべし。毒藥變じて藥となる。妙法蓮華經の五字は悪變じて善となる」とありますが、「毒藥變じて藥となる」というのは、竜樹菩

薩の『大智度論』に、

「大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」

の文に由来しております。よく、変毒為薬という言葉は聞きますけれども、これは元々は『大智度論』のなかの言葉なのであります。

この『大智度論』を著した竜樹菩薩は、もともとはバラモンの方でありましたが、小乗仏教から、のちに大乘仏教に転じて、空の思想を説いた人であります。中観派の祖と言われておりますが、同時に、俱舎・成実・律・法相・三論・華嚴・天台・真言の八宗の祖とも言われております。

この方の著した書物として『中論』とか『十二門論』と共に『大智度論』があるのであります。

天台大師は、この竜樹の『大智度論』の「大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」の文を承けて、『法華玄義』に、

「譬えば、良医の能く毒を変じて薬と為すが如し。二乗根敗、反復すること能わず。之を名づけて毒と為す。今の経に記を得るは、即ち是れ毒を変じて薬と為す」（学林版玄義会本下 九九頁）

とおっしゃっております。解りやすく言いますと、永遠に成仏できないとされた二乗でさえも、この法華経の功力によって成仏することができ、これを譬えているのが「変毒為薬」という言葉だとおっしゃっているのです。末法今時においては、三大秘法の御本尊の功力が、一切衆生の煩惱や苦悩を転じて、即身成仏させるということをおっしゃっているのであります。

故に『四条金吾殿御返事』には、

「竜樹菩薩の大論に法華経の一代にすぐれていみじきやうを釈して云はく『譬へば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し』等云云」（御書 一二八七頁）

と仰せになり、また『始聞仏乗義』には、

「竜樹菩薩、妙法の妙の一字を釈して『譬へば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し』等云云。毒と云ふは何物ぞ、我等が煩惱・業・苦の三道なり。薬とは何物ぞ、法身・般若・解脱なり。『能以毒為薬』とは何物ぞ、三道を変じて三徳と為すのみ。天台云はく『妙は不可思議に名づく』等云云」（同 一二〇八頁）

と示されております。

つまり、この変毒為薬する妙の一字の功德も、結局は信の一字によって受けることができるわけでありますから、病氣や生活苦なども、逆にそれが動機となって信心に目覚め、大功德の生活を確立することができるのであります。

病氣をしたり、あるいは貧乏をしたりといったことは、そのなかに沈んでしまうと、それですべてが終わってしましますが、困難を一つの契機として信心に励むことによって、倍する功德、倍する幸せな生活が待っているわけでありますから、私達はどんなことがあっても、すべてを変毒為薬していく信心をもって、これを克服すべきであります。

だから、大聖人様は、

「難来たるを以て安楽と意得べきなり」(同 一七六三㊦)

とおっしゃっているのです。苦しいからといって、逃げるのではなく、そこに信心を立てていくことを御教示されているのです。我々の心構えとして、困った時にこそ「よし、来たな」と信心に住していけば、必ず変毒為薬していけるのであります。

これと同じことを『太田入道殿御返事』に、

「天台此の論を承けて云はく『譬へば良医の能く毒を変じて薬と為すが如く、乃至今経の得記は即ち是毒を変じて薬と為すなり』と。故に論に云はく『余経は秘密に非ず。法華を秘密と為すなり』云云。止観に云はく『法華能く治す、復称して妙と為す』云云。妙楽云はく『治し難きを能く治す、所以に妙と称す』云云」(同 九一一㊦)

と仰せであります。つまり、法華経はすべての毒を変じて薬と為すから「妙」と言うのだと言うのです。我々の人智では、なかなか計ることができない、偉大なる、そして巨大なる功德があり、私達を本当に幸せにする無限の力を秘めているのが、この妙であるから、この妙法蓮華経をしっかりと信心していくことが大事であります。

また、絶対に治らないという病気を治していくのが妙、つまり妙法蓮華経であるとおっしゃっております。

この御書は、そもそも太田入道殿から病気の報告があり、それに答えられたものでありまして、そのなかでは、病気の原因を挙げて、自身の法華誹謗の重罪を示され、法華経の信心による病氣平癒を御教示あそばされているのであります。

御書のなかの、

「病によりて道心はおこり候」(同 九〇〇㊦)

というお言葉を、皆さん方もよく聞いたことがあるでしょう。これは『妙心尼御前御返事』にお示しの御文でありまして、

「このやまひは仏の御はからひか。そのゆへは浄名経・涅槃経には病ある人、仏になるべきよしとかれて候。病によりて道心はおこり候か」(同㊦)

とおっしゃっているのです。だから病は、まさに変毒為薬する絶好のチャンスであるのです。けっして病という魔に負けてしまい、生命力を失ってしまってはだめなのです。

もちろん、これは病だけではありません。生活苦もそうでしょう。あらゆる悩みも、そうでしょう。悩みを悩みとして、ただ受けるだけではだめなのです。そこに、悩みや病気、あらゆる困難を克服していく信心があれば、必ず乗りきることができるのです。

「病によりて道心はおこり候」とおっしゃっているけれども、この「病」を、すべての苦難に置き換えれば、我々は、そういった苦しみに、どう対処すればよいか必ず判ってまいります。このように大聖人様は、おっしゃっているのであります。

さて、次に「玉泉と申す泉は石を玉となす。此の五字は凡夫を仏となす」と仰せです。

「玉泉」というのは、玉は要するに褒め言葉でありますから、清らかな泉のことで、この玉泉は、石を玉すなわち宝石に変えることができるのですから、すごいですよね。それと同じように、妙法蓮華経の五字は凡夫を仏に変えることができると、大聖人様は断言していらっしゃるのです。

ただし、我々に信心がなければ、だめです。『当体義抄』には、

「正直に方便を捨て但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転じて、三觀・三諦即一心に顯はれ、其の人の所住の処は常寂光土なり」(同 六九四頁)

と仰せになっております。

「正直」とは嘘や偽りのないことでありまして、例えば、権を権と知り、実を實と知り、迹を迹と知り、本を本と知り、脱を脱と知り、種を種と知る、これを正直と言うのであります。

そして、権を権と知り、実を實と知る時は、権を用いずにこれを捨て、本迹、種脱においてもまさに同様でありまして、権実雑乱、本迹迷乱、あるいは種脱混乱は邪曲の義なるが故に、これらを全部、捨て去ることを「方便を捨て」と言うのであります。

方便とは、仏様が衆生を真実の教えに導くために用いた仮りの教えですが、これは、ビルや家を建てる時に組む足代、足場のようなものです。

足場がなければ家は建ちませんから、足場は組みますが、家が建ってしまったならば、その足場はどうなるのでしょうか。いつまでも足場があったならば、家は家として活用できません。だから、足場は取り払わなければならないのです。具体的に言うと、法華經以前の爾前権經の教えは全部、足場の役目なのであり、家を建てるまでは必要ですが、法華經という家の本体が建ってしまえば、足場はいらないのであります。

次に「但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人」とありますけれども、これは純粹に法華經を信じて南無妙法蓮華經と唱える人のことを指しており、その御文意は、謗法の念慮を断つことが大事であるということでありまして、

この御文は極めて大事でありまして、「但」というのは、それだけという意味なのです。ただ法華經を信ずるのであって、あちらもこちらも信じるというのは「但」と言いません。ここに、本宗において謗法を厳しく誡めている所以があるのであります。

また、この御文に「法華經を信じ」とあるところから、これは権実相對の文であると言う方がいますけれども、そうではなく、まさしく「但法華經の本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經を唱える人」と拝すべきです。つまり、大聖人様の御書をしっかりと信じ、そして南無妙法蓮華經を唱える人ということになるのであります。

次に「煩惱・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転じて」とありますが、「煩惱」というのは見思・塵沙・無明の三惑のことで、この煩惱から「業」つまり五逆とか十悪、四重が起こり、またそこから「苦」つまり苦果の依身たる五陰とか十二入が起こるのです。

すなわち「煩惱・業・苦の三道」というのは、衆生が六道の生死を繰り返して行く状態を示したものであり、煩惱が悪業の因縁を作り、その悪業の因縁によって苦しみ、苦からまた元の煩惱にと、この三つをグルグル回って、いつまで経ってもそこから逃れられないのです。これを三輪と言ひ、不幸から脱却できない姿があるのであります。

では、この煩惱・業・苦の三道を「法身・般若・解脱の三徳」に転ずるのは何かとい

うと、これこそが文底秘沈の南無妙法蓮華經であり、この妙法蓮華經の偉大なる功德力りきによるわけでありませう。

竜樹菩薩は『大智度論』のなかで、妙の一字を釈しまして、

「譬えば大薬師よの能く毒を以て薬と為すが如し」

とおっしゃっているのであります。また、天台大師は『法華玄義』に、

「言う所の妙とは、妙は不可思議に名づくるなり」(学林版玄義会本上 九ぎ)

と述べられているわけでありませう。つまり、法身・般若・解脱の三徳へと転じていくのは、まさに「言う所の妙」の力、妙不可思議なる力であり、その妙不可思議なる力の根源は、我々の信心なのである。

よく四力成就ということを行います、その信力・行力・仏力・法力の四力のうち、御本尊様には仏力と法力が既に具そなわっているわけですから、あとは我々の信力と行力だけそろえば、四力が成就するのである。ここに、我々の御本尊様に対する信念・信力、そしてまた折伏を行ずる力・行力が、いかに大切であるかということが解るのである。

また今、申し上げましたように、煩惱・業・苦の三道の迷いも、妙法蓮華經を信仰することによって、法身・般若・解脱の三徳に転ずるのであるが、この法身・般若・解脱の三徳は、そのまま法身・報身・応身の三身如来に対応するのである。すなわち、法身は法身如来、般若は報身如来、解脱は応身如来に配せられるのである。

しかも、十界互具一念三千の理法によるならば、この三道と三徳は衆生の一念に具わっていて、本来、一体不二のものだと示されております。つまり、三道によって三徳があり、三道を離れて三徳はないし、三道の本体は三徳であります。ただ、現実に三道が三徳と現れないだけのことでありませう、これは我々衆生の持っている煩惱たる三道を断つとか、これを離れて三徳を現ずるということではないのである。

あくまで、妙法という正法・正境に出値い、題目を唱えていくと、我が身はその身そのまま即身成仏することができるのである。ですから、この御書のなかで「転じて」とおっしゃっている意味は、その体たいを改めず、ただ、その相を変ずるだけのことでありませう。別に、人体を変える必要もありません。これが妙法蓮華經の功德です。御本尊様と唱題の功德がいかに広大であるかということが、お解りいただけると思ひます。

次に「三観・三諦即一心に顕はれ、其の人の所住の処は常寂光土なり」とありますが、「三観」というのは一切諸法を即、三諦なりと観ずることでありませう、これは能観の智であります。それから「三謗」は、諸法の真如実相の理を空・仮・中の三面から示したもので、所観の境です。そして「即一心に顕はれ」というのは、この境智の二法が我々の一心に顕現することを言うのであります。

ですから『曾谷殿御返事』には、

「仏になる道は豈境智あにきょうちの二法にあらずや。されば境と云ふは万法の体を云ひ、智と云ふは自体顕照の姿を云ふなり。而るに境の淵しかほとりなくふかき時は、智慧の水ふちながるゝ事つゝがなし。此の境智合しぬれば即身成仏するなり」(御書 一〇三八ぎ)

と仰せられております。

すなわち、ただ法華經を信じて南無妙法蓮華經と唱える時は、本地難思の境智の妙法を、すべて我が一心に顕して、本門寿量の当体の蓮華仏を我が身に顕すことができるということでありませぬ。

そして「其の人の所住の処は常寂光土なり」との仰せは、依正不二ということを顕しているのではありません。

つまり「其の人」というのは、煩惱・業・苦の三道を法身・般若・解脱の三徳に転じた人で、正報を示し、「所住の処」等とは依報であります。すなわち、住むところの国土世間は依報で、そこに住む我々人間は正報という関係になるのではありませんから、この御文は、まさに依正不二を明かされているのではありません。

また「常寂光土」というのは、仏の住する清浄な国土のことで、当体蓮華仏の住する国土でもあります。この三道即三徳の妙人の住する処は常寂光土なりとの御教示は、要するに依正不二、娑婆即寂光の原理を示されたものでありまして、穢土と嫌われた娑婆世界を常寂光土と変えることができるか否かは、結局は正報たる我々衆生の開悟によって決まることを示されているのではありません。

つまり、この国土世間が平和であるためには、我々が正しい信心をしていかなければならないということでもあります。その関係を『瑞相御書』には、

「夫十方は依報なり、衆生は正報なり。依報は影のごとし、正報は体のごとし。身なくば影なし、正報なくば依報なし。又正報をば依報をもて此をつくる」（同 九一八頁）

と仰せになっております。つまり、正報は体、依報は影であつて、正報たる我々衆生が妙法信受の功德によって当体蓮華仏と顕れば、依報たるこの国土世間も必ず常寂光土になるとおっしゃっているのです。

今日の混沌とした、いわゆる末法濁悪の世相を救うのは、まさに正報たる我々衆生なのです。国土世間が勝手に幸せになったり、常寂光土を築いたり、また地獄を築いたりするではありません。この国土世間が、どういう国土世間になるかは、結局、正報たる我々にすべてが掛かっているのではありません。

最後に「されば過去の慈父尊靈は存生ぞんしょうに南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人なり。石變じて玉と成るが如し」とおっしゃっております。

これは、内房女房に対しまして、「父上は生前中に、信心強盛に南無妙法蓮華經と唱えたのでありますから、即身成仏は疑いない。それはちょうど、石が變じて玉となるようなものである」と言っているのです。

これはどういうことかという、石が變じて玉になるように、妙法には不可能を可能に転ずる廣大無辺な力があることを、お示しになっているのではありません。

このことは大事なことであります。よく信心即生活と言いますよね。やはり、信心を中心にして、しっかりと生活していくならば、そこから一つずつ変わっていくのです。皆さん方も、そういう経験がたくさんあると思います。

なかには、なかなか利益を自覚できない方もいるかも知れませんが、利益には顕益けんやくと冥みょう

益とがありまして、目に見えた功德を頂くことのほかに、実は、皆さん方が信心していくなかで、冥益という目に見えない大きな功德をも頂いているのです。

だから、華やかにパッと開いた花ばかりを意識してしまうと、「いくら信心しても、どうも功德がないな」というように思ってしまう人がいるかも知れません。けれども、そうではないのです。皆さん方は本当にすばらしい功德を一つひとつ、全部、頂いているのです。その功德を感じていかなければいけません。そして、その感謝の気持ちが信心に顕れて、その信心がまた、すばらしい功德を生むというように、どんどんと良いほうへ、良いほうへと回っていくのです。

ですから、どんなことがあっても、しっかりとお題目を唱えるということを忘れず、必ずそこに大きな功德を頂戴していることを確信し、しっかりと信心に励んでいていただきたいと思います。

特に今、宗門は平成三十三年・宗祖日蓮大聖人御聖誕八百年の記念すべき大佳節に向かって精進しております。

お陰さまで、第二祖日興上人御生誕七百七十年の記念事業は、無事に奉修することができました。残念ながら、極々本当にわずかの、何力支部かが誓願を達成できませんでしたけれども、総体的には誓願を達成することができました。これも、本当に皆さん方の御信心のお陰であると、心から感謝するものであります。

この勢いをもって、是非、次の平成三十三年に向かって、精進していただきたいと思います。

折伏は、厳しいでしょう。あるいは苦しいかも知れません。しかし、どのようなことでもそうありますように、本当の幸せというのは山坂を越えたところにあるのではないのでしょうか。寝ていて幸せを掴んだ^{つか}という人の話は、聞いたことがありません。遊んでばかりいて、それで幸せだと言うような人は、まだ本当の幸せを知らないのです。だから、本当に異体同心して、みんなで険しい山も登って、そして晴れて大御本尊様の御照覧を仰いでいただきたいと思います。

皆様方の、これからの御精進を心からお祈りいたしまして、本日の講義を終わります。